

Title	Dancourt劇の欺し役と欺され役
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.115-p.131
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80544">https://hdl.handle.net/11094/80544</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Dancourt 劇の欺し役と欺され役

赤 木 富 美 子

## Les fourbes et les dupes dans le théâtre de Dancourt

Dans notre article précédent, nous avons remarqué que dans le théâtre italien, le public français favorisait Colombine, surtout dans les rôles de soubrette. Sans biens, sans naissance, “l'esprit” seul était le fonds de ces jeunes filles, et cela enchantait le Paris de la fin du siècle.

Nous étudions dans cet article les oeuvres de Dancourt, en y cherchant quels étaient les fourbes, leur principe, leur morale, et quels étaient les dupes, leurs situations et leurs professions. “L'esprit” étant toujours adoré dans ces oeuvres, les possesseurs en étaient divers chez Dancourt. Nous analysons cette caractéristique et essayons d'en trouver la raison.

前号では、1680年にフランスに定着してから、1696年に追放されるまで、その奔放な現実諷刺で、首都の人気をさらったイタリヤ劇団をとりあげ、この劇団が、当時のフランス人の好みに合わせて、変型してゆくに従って、Colombine の活躍が、めざましくなってゆくことに注目した。<sup>(1)</sup> Colombine が若い娘であり、その持役が、りこうな小間使役だったことは、17,8世紀の女性観の流れを求めているわれわれにとって、興味ある現象のひとつであった。この事実はまた、18世紀の Marivaux 劇の特徴である、「自分で自分の運命をきめることのできる娘たち。」が、すでに17世紀末の多くの劇に見られるという、それまでのわれわれの注目を、傍証するものでもあった。<sup>(2)</sup>

このイタリヤ劇団と共に、主都の観客をわけ合っていたのは、Comédie-Française とオペラである。<sup>(3)</sup> われわれは当然、そこではどんな現象が見られるだろうかという疑問へ導かれる。Comédie-Française のためにかかれた劇のすべてについて調査することが必要であるが、この小論ではその手始めとして、俳優としてもこの劇団を牛耳っていた<sup>(4)</sup> Dancourt の劇について調べてみたい。Lankaster の研究<sup>(5)</sup>によれば、Dancourt の名で発表された劇は全部で53であるが、1700年以後のものは、歌と踊りが主になった作品が大部分なので、<sup>(6)</sup> 一応参考にするにとどめ、1685年6月8日初演の *Les Fonds perdus* から、1700年10月8日初演の *Trois consines* までの喜劇30を対象として取上げたい。この中、1692年までは、Saint-Yon 等との共作が多く、また

Dancourt のものとされているだけの作品もある。これについては、Lankaster の詳細な研究があるが、われわれは、いずれは Comédie-Française で公演された劇全体について調査するのが目的なので、Dancourt の名で発表されたものを、すべて検討することにした。<sup>(7)</sup>

ところで、Dancourt は、Molière の遺産の中、風俗喜劇を徹底的に発展させた人として知られている。<sup>(8)</sup> これらの劇を一べつすると、一つの主題を中心にして構成されているものの他に、風俗喜劇の常として、当時の社会に見られた様々な身分、職業の人々のタイプを、次々と登場させて、tableaux 風に陳列するという構造をもったものが、かなり見られる。いずれの場合でも、筋の面白さの中心に、必ず欺され役と、欺し役が、存在しているのが目につく。すなわち、Molière 劇によく見られたように、頑固な父親を出しぬいて、いかに恋人同志が結ばれるかといった伝統的な筋の場合でも、Dancourt 劇では、その策略の面白さが多様で、興味の中心をなしており、屢々、主人公の性格描写をしのぐのが目立っている。次々と人物を陳列する tableaux 風の場合でも、簡単ながら、この欺しの主題が、一つは見出される。そこで、欺し役と欺され役という Critérium を用いて、全部の劇を調べてみるなら、何らかの特徴を示す結果が、得られるのではないかと予想される。欺し役が、作者の代辯者だとは、必ずしも言えないが、少くとも欺し役は、観客の反感をかう立場ではないだろうと想像できるからである。逆に、欺され役については、滑稽な目にあって笑われるだけの、素地が、観客の意識の中に、存在している筈である。まず表によって、欺され役と欺し役の立場を一覧してみよう。

題名及初演の年	欺され役				欺し役						コ ン ビ ン グ の 男 女 の 間 使	備 考	
	父 母 ( * 印 )	vieux amou- reux		身 分 職 業	下 小 間 使 ( 主 張 ○ 印 )	令 嬢	joli homme	aven- turier		そ の 他			
		男性	女性					男性	夫人 役				
Les Fonds perdus (1685, 8 juin)	1, 1*	1	1		riche bourgeois riche bourgeoisie	1	1°					1	
Renaud et Armide (1686, 31 juillet)			1		bourgeois	1	1°					1	
La Désolation des Joueuses (1687)	1*				joueuse	1	1		1				
Le Chevalier à la mode (1687, 24 oct.)			2	令嬢 1	riche bourgeoisie baronne			1					
La maison de Campagne (1688, 27 janv)	1				procureur						hom- me de robe 1	1	
L'Eté des Coquet- tes (1690, 11 mai)			1	3	financier, abbé comtesse maître à clanter		1°	1					d = 欺 し合い 型 (1)は令 嬢が変 装
La Folle en chère (1690, 30 mai)	1*					1	1 1°	(1)					
La Parisienne (1691, 13 juin)	1, 1*			2	riche bourgeois, gen de robe, gen d'épée		1 1					1	
La Femme d'int- rigue (1692, 30 janv)				多	tableaux 風に				1	1			1d

題名及初演の年	欺され役				欺し役						コ ン ビ av の 男 女 小 間 使	備 考		
	父 母 ( ＊ 印 )	vieux amou- reux		そ の 他	身 分 職 業	下 小 間 使	(主 謀 ○ 印)	令 嬢	joli homme	aven- turier			そ の 他	
		男性	女性							男性				夫人役
L'Opéra du village (1692, 20 juin)	1			2	fermier とその甥 オペラの募集人	1		2						
Les Bourgeoises à la mode (1692, 15 nov)		2			notaire commissaire	1	1		1			夫人 2	1	
La Gazette (1692, 24 avril)				多	tableaux 風に	1		2°						
L'Impromptu de la Garnison (1692, 26 juillet)	1伯 母					1	1°						1	
Les Vendanges (1694, 30 sep)	1伯 父				riche vigneron	1						offi- cier 伯母	1	
Le Tuteur (1695, 13 juillet)		1				1	1°						1	
La Foire de Beson (1695, 13 août)		1	1		financier							甥とそ の夫人 2		
Les Vendanges de Surène (1695, 15 oct)		1		1	riche paysan riche paysan					1	1		1	
La Foire de S' Germain (1696, 19 janv)	1*	1		1	financier gouvernante					1	1		1	
Le Moulin de Javelle (1696, 7 mai)		1			baron	1				1	1	宿の女 主人 1	1	
Les Eaux de Bourbon (1696, 4 oct)	1	1			médecin baron					1	1	くすり やの夫 人 1	1	
Les Vacances (1696, 31 oct)	1				homme de robe							gou- ver- nante 1		
La Lotterie (1697, 10 juillet)	1					1	1	1					1	
Le Charivari (1697, 19 sep)			1				1	2		1		offi- cier 2	1	
Le Retour des Officiers (1697, 19 oct)			1	2	sous fermier conseiller		1°	2				offi- cier 2		
Les Curieux de Compiègne (1698, 4 oct)	1*					1				1	1	offi- cier 1		
Le Mari retrouvé (1698, 29 oct)				2	baillit paysan									
Les Fées (1699, 8 oct)				1	fée de sage	1	1°						1	
Les Enfants de Paris (1699, 18 dec)			1		usurier	1	1°				2			
La Fête de village (1700, 13 juillet)				1	greffière		1					procu- reur 2		
Les Trois cousines (1700, 18 oct)			1		meunière			3°						

### 欺され役と欺し役の立場

Molière 劇によく見られた、自分の思い通りに娘を嫁がせようとする父親という場合が、7 である。この中 2 件は、自分も若い娘と結婚しようとしていて、後述の老 amoureux と重なっている。父に代って母が、親権を無理押ししようとしている場合は 2 であり、伯父、伯母という設定も 1 ずつある。この数字は、30 という劇の数から見て、さほど多いとも思えないが、老人のくせに若い相手と結婚したがるという設定を調べてみると、老 amoureux が 10、老 amoureuse が 10、と著しい数を示している。若い失恋役は、男が 12、女が 3 と男女の差が大きい。

次に欺す側の立場を見てみよう。ここでは、イタリア劇団でのように、小間使が策略の中心になって活躍するという場合は、割合に少く 7 つの劇にすぎず、女主人の味方になって策略を手伝う場合を入れて 14 件である。逆に策略をあみ出し、その中心になって動く下男の活躍はめざましく、15 の劇がこれに数えられる。更に下男その他に身をやつした Aventurier を入れると、20 という多数にのぼる。これは、恋人役が殆んどきまって士官なので、主人と共に従軍する下男の設定が多く、その活躍が目立つのだろう。これはイタリア劇団と同じである。しかし、イタリア劇団では、小間使役 Colombine に圧倒されていた令嬢役が、ここでは同じ位行動的で、欺し役の中にいる場合が、9 劇 15 人と目立っている。特に自分で計画した策略の中心になるものが 7 人もある。だが更に著しい特徴をなしているのは、一文なしの貴族青年が、貴族になりたい町人女や、年よりの金持女をだまして金をせしめようというケースである。このような構成をもった劇は 7 つもあり、筋に関係のない登場人物としては、もっと屢々現われている。この数字は、欺され役の金持夫人が多いことと密接な関連を持っているわけで、イタリア劇団には見られなかった現象である。最後に、この表の考察で注目しておかなくてはならないのは、詐欺や陰謀の、様々な経験を重ねて、いわば、アウトロウの世界に生きてきた、正体不明の女性たちの活躍である。悪役小間使のなれの果てともいうべきお尋ねものもいれば、伯爵夫人におさまりがえっているものもいるというわけで、その生き方については、後に検討するが、この女たちと、同様の詐欺師とのコンビは 6 件だが、下男+小間使コンビ以上に印象的である。これもまたイタリア劇団に見られなかった現象といわねばならない。

### その身分職業

さて欺され役と欺し役を職業別に比較してみると、どんな結果になるだろうか。欺され役の職業では、医師が 1 件と少く、貴族は老男爵 1 件にすぎず、これに比して、町人階級は、Financier 3, Robe 4, Riche bourgeois 7 件と圧倒的に多い。更に場面を田園にとった作品がかなりあるところから、Riche vigneron, Riche paysan, Sous-fermier の 3 件がある。女性では、年よりの貴族の女性が 2 件に対し、Bourgeoise は、11 件と著しい差を見せている。ただ、ここでは、はっきり欺され役として登場する人物の職業だけを調べたが、下男下女を通して悪口を言われたり、諷刺される Financier や Conseiller はもっと多数にのぼる。

次に欺され役と同様、欺し役を職業別に見ると、下僕、小間使は上述のとおりであるが、策略を計画し中心になって行動する場合の娘役は、町人娘と思われるのが7人中1人にすぎず、後は貴族の娘らしいのが2人、Gazettier の娘が1人、イタリア人の山師の娘が1人、田舎娘が3人と多彩である。これは、30の中25の劇が、若い男女の恋を扱っており、その大部分が町人娘であることと著しい対照をなしており、欺し役として行動する娘役を考察する場合に注意すべき数字だと言える。ついでに相手の恋人役の青年は大部分士官または元士官である。策謀をあみ出した、口車にのせたり、欺し役として活躍する場合は3件と少いのだが、上述のように各プロットの殆んどが、若ものの恋の成就を扱っているので、欺され役の犠牲において、よい目を見る青年役の職業は興味ある現象である。いわゆる、Aventurier<sup>(9)</sup> の、劇の行われる時点での職業は、下僕になりすましているものが多いが、Aventurière の場合には、小間使でなく、実に様々な職業が見られる。*La Femme d'intrigue* の M<sup>me</sup> Thibaut は、凡ゆる種類の仲介をし、おまけに古物商も経営している。駈のきびしい町人娘を誘惑する手伝い (A. I, S. 5) や、金持の未亡人に美男の夫を世話する (A. II, S. 6) とか、ついには女学者がアカデミーに入りたいとまでたのみにくる (A. I, S. 7) といった奇妙な職業である。*Le Moulin de Javelle* では、愛人の chevalier と組んで、金持の男爵をたぶらかす伯爵夫人であるが、これは美貌を種に出世した、洗濯女の娘にすぎない (S. dernière)。*Eaux de Bourbon* では、悪い取持で知られる薬屋の女主人、湯治と称して (S. 10) かも探しにくる子爵夫人が活躍する。*Le Vendange de Surène* の悪だくみ役 M<sup>me</sup> Dubuisson は、庭番の従姉ということになっているが、「パリで一番うまい欺し屋」と言われる詐欺師 Lorange と “commère” “compère” と呼び合う仲である (S. 7.)。*La Foire de Beson* の Frosine は、Acteur の表にも、intrigante と規定されているが、お金次第でどの味方にもなる変な立場の女性である (S. 3)。Molière の守銭奴との類似を言われる *Enfans de Paris* にも、Molière の Frosine と同じ intrigante, M<sup>me</sup> Brichonne が登場する。*La Foire de Saint-Germain* に至っては、M<sup>lle</sup> Mousset は、部屋着売りだが、以前は、de la Dapelardièrre と称していたお尋ねものという有様である (A. L, S. 5)。この他、令嬢の保育係の夫人が、令嬢のために欺し役になっている場合 (*Les Vacances*) 令嬢の伯母が味方して、一役かう場合 (*Les Vendanges*)、など、夫人役の働きが目立っている。これは、イタリア劇団と著しい対照をなしており、その理由は後に考察したい。

先にあげた金持夫人をかもに、貢がせて暮す “joli homme”<sup>(10)</sup> はきまって貴族、または自称貴族であり、大抵は、夏と共に出陣する士官である。欺され役で、あれほど多数にのぼった Bourgeois は、しかし欺し役に絶対にはいないのではなく、*La Maison de Campagne* では、Procureur である主人が、最後にちえをしぼるところを見せるし、*La Fête de village* では、Procureur de Paris と、Procureur de Chatelet の策が功を奏する。陰謀には直接関係しないが、*Le Chevalier à la mode* の M. Migaud は homme de robe, Bourgeois の良識を代表している。但、この3つの場合、いずれも、その妻または愛人の Bou-

rgeoise が、若い貴族にいかれていて、その愚かさを浮出させるために、夫たちの良識が設定されたと推定できる。

### 欺され役の考察

さてこうして、欺され役と欺し役の立場、身分、職業が明らかになったが、欺され役は、ただ、Financier とか、Robe だからとか、Bourgeois だからというだけで、滑稽視され、策略の犠牲になるのではない。このことは、上記の例でも明らかである。この人々が、滑稽な目にあうのを喜ぶ意識が、観客の中にあることは確かであるが、1つ1つの劇には、具体的に、その直接の理由が描き出されている。その1つ1つを検討して、特徴ある輪郭をとらえることができれば、怖らくそれは、Dancourt 劇の現わしている人生観、そしてこれらの劇の観客に受入れられていた一般的な考え方を示してくれると思われる。

さて、これらの欺し役と欺され役の関係の基本的な原理を考える場合、Dancourt をめぐるいろいろの評価が思い出される。まず Dancourt の名には、Cynique という形容詞が、よく併用される。A. Adam は、その17世紀文学史の中で、Dancourt について、「彼は冷酷であり、シニックであり、その登場人物は殆んど悪人であるのは否めない」(t. V, p. 293)と述べている。Lankaster は、*Le Moulin de Javelle* について、“Gynical comedy”と批評し(op. cit. p. 796)、また、Barthélemy は、退廢的な世相のありのままの描写を認めながらも、「それは、その欠点、曲み、滑稽を批判し、からかうためであって…」(*Comédie de Dancourt*, p. 172)と述べている。欺され役が、何故欺されるかという弱点を見てゆくことによって、これらの評価の意味を明確にすることもできるであろう。

まず、Molière 以来の伝統にある、娘の意志を無視して結婚させようという父や母、伯父、伯母がやはり存在する。*La Désolation des Joueuses* の母親は、賭博を助けてくれる自称 Chevalier に欺されて娘をやろうとしているし(S. 2)、*La Parisienne* の母親は、財産を与えてやれないために、善意から65才の金持老人に娘を嫁がせようとしている(S. 7)。*L'Opéra du village* の父親も大した理由もなく、娘を早く片付けようと計画している(S. 1)。*Les Vendanges* の伯父夫妻は、20écus もらって村の Conseiller に姪をやろうと決めている(S. I)。*Les Vacances* では、領地を手に入れて、にわか Seigneur になった父が、同業の Robe に娘を嫁入らせようとする話。*Renand et Armide* も、娘の簪を Robe に決める父の話。*Lotterie* の父、イタリア人は、自分の事業に有利なように、娘の婚約者をどんどん変更する。*Retour des Officiers* では、Sous-fermier にとり入られて、娘をやることに決める母親が出てくる。このように見てくると、娘の結婚を勝手にとり決める親を欺すという設定は、至極一般的であったことがわかる。そしてこの場合、自分の都合だけ考えて、子供の意志を無視したような親は、欺されるのが当たり前という考が、常識のように、欺し役は振まっている。Molière 劇がすでに若者の味方だったことを考えると、20年も後

この時代には、それは当然だったと思われる。しかし、Molière 劇のように、必ず娘の選択が正しいという印象は与えない。娘の恋人というのは、殆んどきまって、戦場帰りの一文なしの士官で、父母の目から見れば、甚だ心許ない輩だからである。そして、これらの親たちも、欺され役とは云い条、ひどい目に会ってはいない結末で、一杯くわされて、予定した候補者が駄目にはなるが、娘の恋人の条件がよくなって、めでたく同意するという例が多い。*Retour des officiers* の母、M<sup>me</sup> Thomas は、娘たちの恋人二人が、それぞれ官職を手に入れ、母の希望どおりまともな身分になったことで満足するし、*Les Vacances* では、令嬢の恋人が、父親に領地を享受させるという条件がととのうことになっている。他にも、*La Lotterie* は、恋人の伯父の Financier が、父親の商売を保護してくれる約束が成立つなど、親の不正をつくといい印象は少ない。

だが、父や母の描き方では、他に、自分自身が若く見えようとしたり、若い相手と結婚するために、娘や息子を結婚させないという、少し変った型が多くなって来ている。*La Foire de Beson* で、父親役の Financier は、若い恋人 Cidalise に夢中で、娘を結婚させようとしな (S. 3)。*Les Enfants de Paris* の父、高利貸も同様である。*La Folle en chère* の母親は、孫が出来て、「おばあちゃんと呼ばれるのは、女性をたっぷり15才は老けさせる」(S. 2, 下僕の台詞)ので、息子の結婚をのぞまない。また *Trois cousines* の母親、粉屋の女主人も、娘たちをたずねてくる恋人たちを、皆自分に気があってやってくると勘違いして、娘たちの結婚など考えもしない (A. 1, S. 4) これらの親たちは、“déraisonnable”<sup>(11)</sup> な、あるいは “extraordinaire”<sup>(12)</sup> な父とか、“étrange mère”<sup>(13)</sup> とか規定されていて、そのような良識に外れた親を欺して結婚することは、手段は詐欺でも許されると、言訳がつけられている。このような親は、単なる結婚の障害である父母よりも、手ひどく欺され、徹底的に笑われることになっている。だが一般に老人の恋愛は、どんなに人がよく、地位があり、金があっても、いや人がよく地位や金があればあるほど、ひどい目にあうことになっていて、この点道徳よりも、完全な青春の優越が謳われている。ところで、老 amoureux が男性の場合は、Molière の「女房学校」や守銭奴以来、見なれたタイプである。だが Dancourt 劇で、著しく目立つのは、上例のように、金持の未亡人が、若い青年と、結婚したがつているケースである。

彼女たちの、欺される弱点は何か、を少し考察してみると、まず第一は、自分の容姿とか、自分のおかれた状況に対する認識をまったく欠いており、途方もない自惚れに気もそぞろになっていることだと言える。*Les Fonds perdus* の M<sup>me</sup> Gérante が、小間使におだてられながら、かつらを選んでる場面などはその典型的な例である。「ああ、金髪のおつけになると、まるで蠟細工の小さな天使のようですわ」(A. 1, S. 5)。これは同時に当時流行した、にせ毛の諷刺なのであろう。顔色はどうかときかれて、Lisette は、「ああ、素晴らしい。百合というか薔薇というか」とおだてるが、「今朝から皆にそう云われるわ。」と夫人は本気である。そして Lisette に、「顔色も髪のように、一番いい色のがつけられればよろしいのに。」と皮肉を云われている (ibid)。失った若さを補う苦勞は、恰好の笑の材料で、女性の場合、一そう具体的、効果的だったといえる。



*La Foire de Beson* の M<sup>me</sup> Argante も自惚れの塊である。Frosine に、「戦争で男の人が少いから、取る者勝ちですよ。」と忠告されても、「いいえ、Frosine, Eraste との結婚は、私次第なのよ。」と、きかない (S. 4)。 *L'Impromptu de la Garnison* でも、老嬢 Aramante は、自惚れのせいで、よい笑いものになっている。「私は、美人と云うのぢやないけれど、…或魅力が、…何かしら英雄的な、高貴なものを持っているの、そうでしょう、Marton。」と小間使にきいている。「ああ、美女の顔立ちですわ、ほら、奥様、Trajan 皇帝に瓜二つでございますよ」(S. 6)、というのが答である。

第二は、虚栄心で、冷静な利害打算をすっかり忘れてしまった Bourgeoise の、貴族になりたい欲望である。そのもっとも典型的な例が、*Le Chevalier à la mode* の M<sup>me</sup> Patin で、きらびやかな馬車で出かけたが、貴族女のがた馬車と、道をゆずる、ゆずらぬで争い、「だまれ、町人。」と言われて、ペしゃんこになってしまう (A. I, S. 1)。小間使が慰めて、「名前だけは立派でも、その名前よりも、朝から晩まで扉口でわめく借金取りで有名な貧乏貴族。」(A. I, S. 3) よりもましでしょうと言っても、「それこそ貴族らしい品のよさ。」だと羨やみ、「馬車を途中で差押えられ、やっと歩いて逃げ帰った。」貴族の話をきかされても、「子爵夫人になれさえすれば、そんな目に会ってもかまわない。」(ibid) と、耳に入らない。実のない、このような虚栄心は、確実に自分の地位を築いて来つつあった Bourgeois 階級の常識からみれば、奇妙なもの、度外れなもの、だったのだろう。彼女と結婚しようとしている、gens de robe の M. Migand は、「はて、女の考とは奇妙なもの」(A. I, S. 5) と呆れている。*La Fête du village* の書記の未亡人は、伯爵夫人の名前ほしさに、若い貴族に欺される。「私は名前だけが欲しいのよ、名前だけが、最大の希いだわ。」(A. II, S. 6) と彼女は叫んでいる。次の場面は、こうした金持の Bourgeoises たちの、虚栄の陳列場である。

M<sup>me</sup> Carmin—「私は商売をやめますの。お金持になったので今では身分に合わないのです。夫に官職を買って Président 夫人になるのです。」管区長夫人—「M<sup>me</sup> Carmin が Président 夫人ですって。／。」書記夫人—「Carmin さん、私は伯爵夫人になりますの。」M<sup>me</sup> Carmin—「まァすばらしい。伯爵夫人さま。」M<sup>me</sup> Blandineau—「そして私は、私は息がつまりそう。もう駄目だわ。」(A. II, S. 4)。だがこれらの夫人たちの虚栄の夢も、本当に実現される時代だった。成程、書記夫人は、思惑外れで、若い伯爵とは結ばれなかったが、もともと年相応の求婚者だった Paris の Procurenr が、伯爵の領地を買い、彼女は伯爵夫人となりおおせる。また M<sup>me</sup> Blandineau は、友だちにおくれてはならじと、夫に職を売らせ、男爵領を買ってもらって「取引はできました。私はもう Blandineau 夫人ではありません。私は Boitortu 男爵夫人です。」と誇らしげに告げる (A. III, S. 8)。男爵領の名前といい、貴族らしくない夫人連の様子といい、そのおかしさは、貴族に成上っていない Bourgeois たちの羨望を多少とも癒してくれたのではないと思われる。たとえ、これらの喜劇が、Bourgeoise を笑っていても、むなしい虚栄心を、愚かなものと、はっきり断定する精神は、貴族階級のそれではない。Dancourt 劇が、Paris で bourgeois の人気

を拍しながら時に宮廷で軽蔑されたことも思い出される<sup>(14)</sup>。それは、金銭の価値を充分に知り、それ相当の値打のある場合にしか何かと取替えることをせず、また金銭を自由にする自分たちの力を充分に知っている階級の精神である。感情よりも、計算を重んじる精神である。このことは、例えば *La Maison de campagne* という劇のような場合に、明確にあらわれていると思われる。M. Bernard は、成上った Procureur である。流行にのって田舎に家を買ったが、夫人の友人の上流社交人や、親類や、近所の貴族などに散々食いものにされる。客たちは主人の金で、御馳走を食べ、賭にあけて、楽しみ、主人は「私がうちで主人だったら／。」と歎く有様。だが成上りものの虚栄心を捨て、外聞を否定した時、妙案が思い浮ぶ。即ち、別荘を Cabaret にしてしまい、客たちから金をとることにしたのである。客たちが集って、主人をよそに、夫人中心に宴会をするのなら、Cabaret と何の変るところがあるだろうか。主人が金を出す理由はない。これは、現実には金を出して Cabaret の主人の役を果している多くの成上り者と、それを食いものにしている落ちぶれ貴族の、辛辣な諷刺である。Epée royal という Cabaret の名前は、それをよく示している。こんな風に外皮をはぎとって、事実を描く、怖しいほどの鋭い目がこれらの劇の各所に見出される。George Dandin は単なる笑いものになっていたが、M. Bernard は、「ほんとにまァ 旦那様の怒るのも無理はないわ。」(S. 22) と小間使の支持を受けている。

感情よりも、利害打算を重んじる精神は、また夫人たちの恋の描き方にも現われている。事実を認識し、冷静な打算のできないものが欺されることは先に見たとおりだが、その上、*Le Chevalier à la mode* の M<sup>me</sup> Patin も、*La Folle en chère* の M<sup>me</sup> Argante も、欺されているとわかって、なお相手を憎めない。前者は、「ああ、Chevalier、あなたは何て悪い人なの／ あなたが欺していることはよくわかっているのに、私は欺され続けずにはいられない。」(A. III, S. 4) と、Racine 悲劇を思わせる科白を吐いている。M<sup>me</sup> Argante も、恋人の移り気を知っても、「ああ、Lisette や、人が何と云ってくれようと、私は彼と別れる力はないだろうよ。」(A. I, S. 9) と同様に感情にひきずられる人間である。同じく彼に恋する老子爵夫人に接われた、という途方もない嘘を使って、相手が逃げ出しても、一向に目がさめないところは、何とも言えず可笑しいが、一寸観点をかえれば、暗い悲劇にもなりそうな恋を、大笑いするためには、感情に乱されぬ頭の働きの絶対とするような、知力一辺倒の基盤が必要である。

以上、欺され役の分析から、欺され役を笑う基盤の中に、2, 3 の特色を見出すことができたと思われる。その第一は、従来通りの、父の専横と、娘の意志を無視した結婚に対する反対、から成立つパターンに見られるもの——良識に反するものを可笑しいとして、一杯くわせるといった、伝統的な考え方である。第二は、金銭の力への信頼から、事実そのものを認めることを旨とし、外聞や虚栄を笑う、市民階級の堅実な精神である。最後には、一切の道德とは別に、感情に溺れることを恥とし、冷静な観察と知力に対する崇拜をもとにした基盤があげられるだろう。この第三のものは、恐らく世紀末の退廃の中から生れてた、新しい時代精神として捉えられそうである。

### 欺し役の行動原理

このことは、欺し役の分析によって、一層はっきりすると思われる。まず、欺され役が、父親としての権利をふりまわしたり、後見役として不当な行為に出たり、良識に外れ、奇妙な行為に出た場合の正当防衛として、欺し役が相手をわなにかけ、令嬢と恋人の結婚が成就するという従来からのパターンでは、しきりに立場の正当性が強調されている。*Les Fonds perdus* では、令嬢の母が、娘の恋人の青年と、青年の父が令嬢と、結婚しようとしており、青年と令嬢は、「では、貴女は僕の姑さんになるのですね。」「そして貴方は、私のお義父さん。」「何と奇妙なこと。」(A. I, S. 2) とその常識外れを歎く。不釣合の可笑しさは、誰の目にも明らかで、若者たちのために、両方の親から金をしぼり取ろうという企みも、正しいことになる。「結局のところ、これら凡ては大して悪いことぢやない。財産が家の外へ出るわけじやなし。」(S. 3) と下男と小間使は強調している。*La Folle en chère* でも、「そのよいお気持ちで凡てが許されますよ。意図こそ立派なものなのです。」(S. 8) と、小間使が令嬢を励ましている。これは伝統的に受入れられた欺し役の principe であり、預った友人の娘と結婚しようとする *Tuteur* も、息子の恋人と結婚しようとする *Les Enfants de Paris* の Harpin も、自然と良識を味方にした、力強い協力者の前に、当然敗れ去る運命なのである。「大丈夫、大丈夫、そんな老いぼれ馬鹿が、どんな手段を構じようと、若者たちの幸福と、それを助ける人たちの巧みさで簡単に無力にできないことがあるものか。」(*Les Fonds perdus* A. II, S. 1) と小間使 Lisette は確言している。このように、いわば正義を味方に欺し役が活躍する Molière 風の作品も見られるのだが、策略の面白さが少し進みすぎて、厳格な監視をまいて、いかにうまく令嬢を誘惑するかといった点にのみ、興味が移ってしまったものが目立ってくる。*Les Curieux de Compiègne* では、「目をふせていなさい。petite fille。」と、Bourgeois 風の教育に厳しい母夫人の目の前で、宿の女主人が、青年の恋心を巧みに令嬢にわからせる、といった何の理由もない青春謳歌の principe が見られる。*Le Charivari* も、Paris から恋人を連れ出しに來た三人の青年が、「どうしても手なずけようのない老いぼれ婆ァ。」(S. 5) である夫人に、いかに一杯くわせるかが、主な興味になっている。*Le Retour des officiers* も軍隊帰りの3人の恋人が母の決めた候補をあざむいて、2人の令嬢や小間使と、いかにうまく結婚するかが、筋の凡てである。こうなってくると、どちらの側が正しいといった言訳も判断も無用で、娘たちは分別なく士官の格恰よさに魅かれ、常に成功する策略は、若者の恋の絶対性という基盤しかもっていない。ただ、駆落ちといった非常手段をとっても、それはいつも結婚するためで、めでたく終るのが、道徳律と検閲<sup>(15)</sup>のきびしい時代の喜劇らしいと言える。

次に、金持の年増女を欺す、“joli homme” の principe はどうだろうか。最も端的に、憶面なく表明されているのは、*Renaud et Armide* の S. 14 の青年とその下男の説明である。Clitandre は自分の本当の恋人 Angélique を前に、その伯母に対する恋の真似は、真物でないと言訳する。下男は更に詳しく説明して、「これが本当のところですよ、お嬢さま。一生貴女さまを愛するためには、生きていなくちやなりません。生きるためには御金が要ります。Jaquinet 夫人はそれ

を沢山お持ちとの評判で、…つまるところお嬢さま、このことには愛は入ってないってことがよくわかりでしょう。」そして小間使は、「如何ですか、お嬢さま。資金のことを考えるのは悪いことぢやありません。確かに生きてゆかなきやなりませんものね。」(ibid) と是認している。要するにお金はどうしても要るのだから、くれる夫人からは搾りとれという論理である。*Le Chevalier à la mode* は、それがテーマになっている例であるが、老男爵夫人と、徴税請負人の未亡人 M<sup>me</sup> Patin を操っている主人公の生き方は、次のようなものである。下僕 Crispan—「つまりその、この2人よりもっと金持の女が現われたら、その最後にお決めになるというわけですね。」*Le Chevalier*—「出てくるだけ皆、出来るだけ長い間操っておくさ。そして俺の難儀を一番よくカバーしてくれる女に決めるのさ。」(A. I, S. 8)。*La Fête du village* の若い伯爵は、恋人 Angélique に、その伯母、書記未亡人と結婚することを、次のように説明している。「だってどうすりやいいんです？ 貴女は財産がないし、僕は仕事もなく収入もない。…僕の生まれと身分は、こんな時には返って重荷なんです。もっといい運にありつくまで、一時、不運に委せましょう。僕たちはお互に若い。伯母さんは、すぐくたばるよ。」(A. I, S. 1)。*Le Retour des officiers* の士官 Clitandre も「僕は、老ぼれ女を破産させるのが大好きさ。趣味でね。でも若い女<sup>おんな</sup>としか結婚はしないよ。」(S. 8) と、同様な人生観を表明している。

では、これらの青年に、どんな取柄があるというのだろうか。婚約者の M<sup>me</sup> patin が、Chevalier de Ville-Fontaine を愛しているときいた M. Migaud はおどろいて言う。「あんな男に結婚する資格はないよ。冒険する時間のない冒険家で100ピストルの収入もない若い馬鹿者で、宮廷でも滑稽なことばかりして知られているだけ。酒を飲んで、煙草を吸うだけが取柄の男さ。」(A. I, S. 5)。だが酒を飲み、煙草を吸うことが、今では、かっこよい時代なのである。Lisette は「それがあなた、飲むのと、煙草を吸うのと、それこそ今日ちや若い人の資格なんです。」(ibid) と説明している。*La Folle en chère* で、“joli homme” に変装した Angélique も、そのコツを次のように述べている。「私は様子よく沢山煙草を吸います。これで酔っぱらいになれば、完全な joli homme ですよ。」(S. 8)

貢がれた金で、洒落れた服装をし、豪華な馬車に乗り、煙草を吸い、酒を飲む以外何の取柄もない彼等だが、ただ共通しているのは、感情に溺れず、冷静な判断と巧みな嘘で、人の心理を操る術を知っていることである。「彼女は僕たちの味方はしてくれないよ。それでも当たり前ほど、僕は嘘を言ったのだから。20回以上も貴女は若くてきれいだと言ったんだからね。」と Clitandre が告白しているように (*Le Retour des officiers*, S. 8)、嘘とお世辞は巧みである。それが、財産もなく、仕事もできない<sup>(16)</sup> 彼等の資本である。*Le Moulin de Javelle* では、宿のおやじに「あの人は全然金を持っていないし、全然稼ぎもしない。それでいて無駄使いはする。どうやっているのかね？」と主人のことをきかれた下僕 Lolive が、「我々は、esprit と処世術の資本で、2万リーブル以上の年金を享けているのさ。」(S. 23) と答えている。

だから彼等は、冷静な駆引を狂わせる感情に自分自身溺れることを、極度に怖れている。*Le*

*Chevalier à la mode* で、Chevalier は、公園で出会った美しい娘のことを下僕と話していて、「もうあの娘のことは話すな、話すな。頼むから。ほら、俺は断然運を開くつもりだ。だから、余り遠くへひきずられすぎそうな感情問題を、この小娘と起すのが怖いんだ。」(A. I, S. 7) と自分の心を警戒している。こうした冷酷なやり方は、当時の青年貴族の生き方の典型とされていて、Lisette は、次のように批判している。「あの Chevalier 様は、奥様のなげきの種になるのぢやないかと心配ですわ。宮廷の方々は、特に若い方々は、奇妙な人物でございますからね。」(A. I, S. 9) このような生き方は、この時代によく見られた社会現象と思われる。*La Femme d'intrigue* には、こうした “joli homme” が次々に登場する。M<sup>me</sup> Thibaut は、その一人に次のように忠告している。「私の云うとおりですよ。美男の貴族さん。身なりがおんぼろになった時には、高利貸に助けを求めるより、女に頼む方がずっといいのですよ。」(S. 6)。また別の “joli homme” は、60才の老夫人なら世話してあげると云われて、「僕は、金にはこだわりますが、年にはこだわらないよ。60才だって、若いと思うね。不満があるとすれば、彼女が80才でないことさ。」(A. III, S. 12)<sup>(17)</sup>

青年貴族のこの生き方には、Bourgeois のように、事業に手を出すことはできず、お金もないのであれば、自分の才覚に頼るしかないではないかという、全くアウトローな、反道徳な考え方が見られる。そしてこの点で、堅実に資本を蓄積してゆく Bourgeois 階級の働きや、新興貴族の上昇からのけられた、下僕や Aventurier の一団と、その人生観が全く一致するのである。

これらの悪だくみ精神に満ちた、喜劇の廻し手の男女の一団を考察する前に、先の研究で手がけた小間使は、Dancourt 劇のこの雰囲気の中で、どんな役まわりを与えられているかを見ておかなければならない。

表で見たとおり、小間使は欺し役の側にしかないし、それは14件と相当の数にのぼるが、策略の中心は、圧倒的に下僕の方が多く、主になって計画をめぐらすのは、7件にすぎない。更に注目すべきなのは、イタリヤ劇団の *Colombine* のように、道徳を無視して女主人の浮気を支持し、金儲けを謀む役よりも、皮肉な相槌をうって、良識を代表し、堅実な市民階級の人生観を示している場合が多いことである。*Les Fonds perdus* の Lisette は、成程、下僕と組んで、策略に手を貸すが、それは所詮、「理を正すため。」(S. 3) であるし、*Le Chevalier à la mode* の Lisette はお世辞を云われても、「どこかの奥様に、云うお愛想をレッスンみたいに稽古していらっしゃるのかと思いましたわ。」(A. I, S. 6) と取合わない。だから貴族になりたい一心の女主人の恋にも一向同調せず、「身分はお金で簡単に買えますけれど、生れはいつも財産をつくってはくれませんよ。」(A. I, S. 3) と忠告している。これはまさしく、自らの力を信じ、貴族の名を、それ相応にしか評価しない上昇 Bourgeois の考え方そのものである。彼女が、M. Migaud に、より多くの共感を感じるのは、そのためである。Molière 劇で令嬢の伯父が良識を代表し、召使が協力するように、Lisette は、Bourgeois 風のまともな生き方を代表して、「貴方にお力添えしたい気がしてなりません。」(A. I, S. 5) と M. Migaud に協力する<sup>(18)</sup>。*La Désolation des Joueuses* でも、小

間使 Lisette は、Lansquenet を禁止されて大騒ぎしている夫人たちの中で、令嬢 Angélique と共に、それを喜ぶ良識派の一人である (S. 1)。 *La Maison de Campagne* でも、令嬢の馳落ちを提案する青年とその下僕を叱りつけて、固いところを見せている (S. 1)。勿論、小間使が、全くの欺し役を果している場合もある。 *L'Imromptu de la Garnison* の Marton のように、「世界で一番巧みなコケットのところで見習奉公をした。」 (S. I) と設定されていたり、 *Les Bourgeoises à la mode* の Lisette のように、召使階級の上昇するエネルギーを表明している場合もある。「こんな風にして、奥様が小間使になり、時に、小間使が今度は奥様になるってわけさ。」 (A. 1, S. 13)。だがこれも Lankaster の言う革命的言辞というよりは、お金を大切にしないものは滅びるという<sup>(19)</sup>、むしろ資本主義形成期の市民階級の考え方を示しているのではないだろうか。事実こうした市民階級の鉄則を自分のものにして、Bourgeois になってゆく召使も多かった時代である。

重要なのは、小間使の働きが、令嬢を必ずひきずってゆくイタリヤ劇団とちがって、Dancourt では、小間使は皮肉な傍観者である場合が多いことである。例えば、 *L'Été des Coquettes* でも、Lisette は令嬢 Angélique の助手にすぎず、令嬢の、感情を抑えた、策略にあげくれる生き方を理解しない。「おやまァ、私はそんな気持にはなれませんよ。結婚というものについて聞かされているところでは、結婚を嫌になるなんてことは考えられませんわ。」 (A. I, S. 1) と至極健全な意見を述べている。また *La Femme d'intrigue* で策謀を商売にまでしている女主人の助手をつとめるのは、小間使 Lisette ではなくて、その従兄である。

こうして、小間使そのものの登場は、決して少なくなく、その役割も他の劇とそれほど変わらない場合が多いにも拘らず、その大部分は、Dancourt 劇で目を射る、アウトローの一団から外されていて、むしろ堅実な生き方考え方をする階級として描かれているということがわかる。ただ、やがて Marivaux 劇に見られるような、惻巧な小間使と下僕が、主人たちと恋の二重奏を奏で、結婚に至るというパターンは、Dancourt 劇にも多い。

そして、Dancourt 劇の主謀役には、こうした分別のある、若くて賢い小間使に代って、道徳的顧慮の一切を脱ぎすてた、悪だくみのなれの果てともいうべき、奇妙な女性の登場が目立っている。先にあげたように、その職業はさまざまだが、これらの Aventurière は、同じく策略の生活を送る Aventurier と腕を競い、その欺し合いの競争が、巧みな面白さを織りなしている。 *La Foire de Saint Germain* で、Clitandre が、一目惚れした令嬢は、「母親は未亡人、模範的なきっちりや。」 (S. 7) で「お付き女中は怪物みたいに不細工な奴で、怖い堅物。」 (ibid) という状況。これに渡りをつける役を、Lorange と、M<sup>lle</sup> Moussez は、「仕事がどんなに難かしくても、二日以内にやってのけると賭けよう。」 (Lorange : S. 7) とか「私ゃ24時間で成功と賭けるわよ。」 (M<sup>lle</sup> Moussez : ibid) と引受ける。恰度、難しいゲームに、如何に成功するかを見るたのしみになっている。

また、これらの欺し屋は、すぐ事態をのみこんで仲間を組み、欺しの分担を果す。 *Moulin de Javelle* で Lolive は、Chevalier に、自分を手伝う身内の悪人共がここにいないのは残念だと云

った後で、「でも貴方様は、例の伯爵夫人とここで落合う約束ですな。あの女は、私の身内の立派な奴等と引かえになりまさァ。心配なさるな。伯爵夫人はちえがある。すぐ私の考に仲間入りしますぜ。」(S. 25)と云っている。同類を見抜くこともすぐできて、「そいつと、一寸でも差して仕事をすれば、そいつが何をしているか、どこで手を覚えたか、またそれ以上のこともお報らせしましょう。」と *La Désolation des Joueuses* の Merlin は請けあっている。(S. 3)

ある時はまた、互に欺し欺されて、面白い観物になる。*La Femme d'intrigue* で M<sup>me</sup> Thibaut が, Conseiller 未亡人になりすまし、結婚しようとしている相手は、同じく上官の名を騙る La Ramé である。2人のことを、「ガスコーニュ人と、ノルマンディー人がこの世間にいるのは、恰度、寓話に猿と狐がいるようなものだ。」(A. I, S. 1)と、La Brie が言っているのは、狐と狸のばかし合いといったところであろう。最後の幕切れは、「何ですって、M<sup>me</sup> de Bretagne, 貴女はガスコンを、しかもガスコンの Capitain をペテンにかけようってのですか。」(S. 14)「上には上があるものさ。」(終幕)ということになる。*L'Eté des Coquettes* の令嬢 Angélique と、やくざ士官 Clitandre も、よい勝負である。「あら、むきになることはないでしょう。そちらが先に欺したのよ。仲よくして、水に流しましょう。」(S. 24)という結末。*Le Moulin de Javelle* では、伯爵夫人が洗濯女の子とわかって、相手の男爵 Ganivet は少しも驚かない。何故なら彼もまた、百姓出の成上り貴族にすぎなかったからである。「どうして馬鹿な縁組なんです?…私もこの女以上の身分のものちやありません。お互に恨みっこなしですよ。彼女は伯爵夫人になった。私をも、きっと何かにしてくれるでしょう。」(S. 34)。貴族の身分が金で買える以上、こんな風に安っぽく扱われても、何の不思議があるだろうか。そして資本のない、収入のないものは、自分のちえの力で生きてゆくしかないではないか。これらの *Aventurier* の principe は、偽善的な道徳の許で、巧みに地位を上昇させ、金をためこんでゆく Bourgeois への反感で裏付けられている。『しかし』とは何です?。George Ganivet 氏は、貴方様の御家族を破産させた代訴人の息子ですよ。父親が死んで息子が財産を相続した今、彼に弁償してもらうのは当たり前でしょう。」(ibid. S. 25)と、一文なしの青年貴族に、下僕は欺すことを奨めている。*La Maison de Campagne* で、「お客たちが言っていますよ。郊外へ、homme de robe を食いものにしに来るのは神様の恵みだって。Paris では貴方が人々を食いものにしているんだってね。」(S. 21)という科白はこの反感をよく現わしている。また *Renaud et Armide* では、小間使 Lisette が「自分の知っている娘を Robin にはやれぬ。」(S. 6)と反感を示す。金銭が万能になりつつあった。「人に何と云われようと平気でいらっしやるのも尤もですわ。悲しみと現金は一緒の家には住みませんもの。」(*La Foire de Beson*, Frosine の科白。S. 4)。金銭を得る手段が何であれ、必要なものを手に入れるためには、凡ては許されるのである。彼らの手だては唯一つ、自分の頭の働きだけである。*L'Impromptu de Garnison* の Marton は、「ねえ貴方、財産がない時には、才能を身につけなくちゃなりませんもの。」(S. 1)とずばりこの関係を表明している。

そこから、彼らの言葉でいう, esprit の絶対崇拜が生れてくる。それは凡ての資本である。「esprit

と savoir-faire の資本で。」と *Moulin de Javelle* の下僕は説明したが、*Le Chevalier à la mode* の Chevalier も「難儀を逃れるには何と esprit が要るんだろう。」(A. II, S. 10) と自分で感心している。*La Maison de Campagne* でも、主人が「esprit って素晴らしい。」(S. 19) と叫んでいる。*Les Fonds perdus* の下僕 (A. I, S. 1.), *L'Été des Coquettes* の小間使 (S. 25), *La Folle en chère* (S. 2) の下僕の台詞など、凡て esprit の力に感心したものである。欺し役が欺し役の力量を認めるのもまた、この esprit の印によってである。Dancourt 劇の中で最もよく当たった<sup>(20)</sup> 喜劇 *La Vendange de Surène* でも、M<sup>me</sup> Dubuisson は、「あんたたち三人とも、esprit がある。一緒に力を合わせて、必要な手を打って下さい。私は私で、あんたたちの張る網へ、奴さんを放すから。」(S. 7) と、悪者共の協力が観ものである。

この一切のモラルを無視した esprit の世界では、馬鹿ものであることだけが恥である。「馬鹿をくいものにして、ちえのある人々が金持になるほど正しいことはない」(*La Lotterie*, S. 14) のである。*Le moulin de Javelle* の下僕のように、馬鹿ものは皆、彼らの享楽生活のよい<sup>か</sup>ものである。「…これら皆から税金を取立てますんでさ。我々の領地は、色きちがいの婆<sup>ア</sup>たちを勘定に入れなくってさえ、ずい分広いんでさ。」(S. 24)。和議が成立するときや、忽ち Conseiller を欺して、自分の軍隊を、官職と取替えた士官 (*Le Retour des officiers*) が、道徳や人格と関係なくここでは勝利者である。こうして、A. Adam のいう、「l'intelligence tient lieu à la morale.」<sup>(21)</sup> という Dancourt 評が実際に証明される。

Dancourt 最高の大当たり劇、*La Vendange de Surène* を評して、「a gallery of rogues.」(op. cit. p. 791) と Lankaster は云っている。伝統的なパターンにまじって、大きな特色として目立つ、これらのアウトローに対する観客の愛好を、われわれはどう考えたらよいだろうか。時代は動揺へ向っていたのか。人々は自分の運命の変化を信じていたのだろうか。彼自身、「Dancourt, cet effronté coquin」<sup>(22)</sup> と評された作者が、とりあげて演じたこれらの劇と、その時代との複雑な関係を推定することは、今の段階では危険だと思われる。

最後に、われわれの課題にとって、最も興味のある令嬢役はどうだろうか。Molière 以来の、父の専横を筋の中心にした劇では、令嬢役は、大人しく、理性と節度を重んじる、淑かな娘なのが普通である。「たとえどんな情念を私が持つことがあっても、それはいつも理性と節度に従うものでしょうよ。」(S. 3) という *Le Tuteur* の令嬢のような例は、*Les Fonds perdus* にも、<sup>(23)</sup> *La Désolation des Joueuses* にも、<sup>(24)</sup> *Les Vacances* <sup>(25)</sup> にも、各所に見出される。またその他の劇も、驕の厳しい Bourgeois 娘を、士官と組んだ悪だくみ役が、如何に誘惑するかというところに、劇の興味をおいた筋が多い以上、その対象は令嬢らしい令嬢なのが当然である。こうして全体を眺めると、従来通りの娘役がその大部分を占めることは事実である。ところが、この他に、先の表でも見たとおり、イタリア劇団とは逆に、小間使の領分を侵して、どんどん自分で計画し、行動してゆく娘たちが目立ってくる。それは最初、*L'Opéra du village* の Louison のように詭辯



を使って駆落ちに同意する小さな田舎娘であったり (S. 9), *La Parisienne* のように忽ち嘘をつく術を覚え小間使を驚かす (S. 16) パリ娘であったりするが、やがて、*L'Été des Coquettes* の Angélique の冷い享樂的な姿で描かれていたり、*Le Retour des officiers* のにぎやかな三人娘となって、花婿候補を水漬けにしたり、*La Gazette* の Fillon のように親友の恋の成就を謀って活躍する。更に、*Trois cousines* の三人娘のように、謀の中心になり、劇の興味を支える主役になってゆく。このように欺し役の中心になる娘たちが、後半に数を増してくることは、興味ある現象である。この理由の一つとしては、ここでは取上げる余裕がなかったが、Dancourt の末娘 mimi とその姉の、劇団での活躍が考えられるが、果してそれだけが原因かどうか。この現象をどのように評価するかは、更に広い範囲の研究によらなければならないと思われる。

以上、欺し役の分析から、われわれは欺され役の分析と同じく、2, 3 の特色を見出すことができたと思う。伝統的な父権の専横に対抗する場合の、笑の基盤は、良識であり、自然を信じ、若ものの幸福を希う善意が、欺す側の principe になっている。だがその他に、道徳と一切関わりなく、冷静な心理観察をもとに、虚栄や自惚に目のくらんだか<sup>カ</sup>を操って、ゲームを楽しむように欺すことをたのしむ、esprit 崇拜の精神が目につく。そしてこの esprit は、必ず金のために働いていて、アウトローの一団が劇の担い手である時でも、Honoré de Balzac の世界のような、上昇する Bourgeoisie の金銭万能主義が見られるのである。

最後に、われわれにとって興味あることは、欺され役に、Bourgeois 階級の夫人の著しい増加が目立ち、男性の老 amoureux を凌いでいること、欺し役にも、Aventurière の、やはり同じ夫人役が目立って小間使を凌いでいることである。これは、Molière 劇からも、イタリア劇団からも、Dancourt 劇を距てる特徴である。その理由の第一には、おそらく、イタリア劇団とちがって Comédie-Française には、年輩の名女優が数多くいて、その見せ場が観客を楽しませたことが考えられる。「この劇団は、非常に人数が多かったので、宮廷とパリで、どちらからもそれと気づかれずに同じ日に上演することが、大変頻繁に行われた。名優は悲喜いずれにも長じていたが、喜劇の方がずっとうまかった。」と La Grange は書きのこしている。<sup>(26)</sup>

その第二は、Comédie-Française の観客は、イタリア劇団よりやや高級であり、大人の劇を好んだと推定することができる。Comédie-Française は、貴族館の多い Saint-Germain-des-Prés にあり、そこからは Opéra も近かった。イタリア劇団が、この界限へ移ることを何度も申請していたことを、P. Méléze も指摘している。<sup>(27)</sup>

そして、これらの繊細な心理のやりとりの綾なす欺し合い劇の面白さは、18世紀を通じて愛好され、おそらく、Laclos の *Liaisons dangereuses* へも至るものではないだろうか。もしそうだとすれば、俳優や観客だけの都合によらない第三の理由が見出される筈である。またこうした背景の中で、令嬢役が活躍の場を増してゆく原因は何だろうか。もっとすぐれた分析方法を見出すこと、もっと遼大な数の劇を取上げ、全体の中にこれらの現象を位置づけることを今後の課題としたい。

## 註 の 部

- (1) 「Théâtre italien における Colombine 役の発展」(大阪外大学報31号)
- (2) 「Marivaux 劇と Dancourt 劇における娘たち」(Gallia X-XI号)
- (3) P. Méléze : *Le Théâtre et le public, à Paris sous Louis XIV* 1659-1715 p.45-46.
- (4) Barthélemy : *La Comédie de Dancourt* p. 14  
Lankaster : *op. cit.* t. IV, p. 768
- (5) Lankaster : *French Dramatic Literature in the 17 century*, t. IV, V
- (6) *ibid.* t. V, p. 150 も同じ意見
- (7) 資料として, Dancourt : *Oeuvres de théâtre*, t. 1-12, 3 vol, Genève, Slatkin reprins. を用い, 初演の日附は Lankaster と相違のある場合には, 後者に依拠した。
- (8) A. Adam : *His. de la Littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle* t. v. p. 292, Lintillac : *His. générale du Théâtre en France*. III, p. 434
- (9) これは冒険家でなく, ごろつき位のいみ。劇中でこの名が用いられている。Lankaster は rogue と訳している。
- (10) W. John Kirkness : *Le français du Théâtre italien*, p. 18-84
- (11) “Que les enfants sont misérables, Dont les pères déraisonnables.” (*Les Enfants de Paris*, S. 7)
- (12) *La Foire de Beson*, S. 3
- (13) *La Folle en chère*. S. 2
- (14) “...En 1696, la petite comédie de *la Foire de Beson*, qui a valu 20.000 francs aux comédiens françois a esté rebuté à Fontainebleau devant la Cour. ... Les gens de Cour, et surtout les dames, affectent de mépriser ce que les Bourgeois ont estimé” De Tralage, *Recueil*, IV, 221, (in Méléze, *op. cit.*)
- (15) P. Méléze : *Le Théâtre et le public*, ch. 1, III, B, La Censure.
- (16) 貴族が事業に手を出せない不文律に不満な考もあったらしい。“Un homme de votre qualité dans les affaires?” Le Come— “Pourquoi non ? Les gens d'affaires achètent nos terres, ils usurpent nos titres et noms même ; quel inconvénient de faire leur métier” (*La Fête de village*, A. III, s. 4)
- (17) 紙数の都合で省いたが, *La Foire de St'Germain* の老 Financier は, “je les (les femmes) amuse, je ne conclus rien” (S. 16) とこの生き方を真似して, 散々な目に合わされる。
- (18) もっとも, 後で女主人の義兄から礼金ももらうことになる (A, V, S. 1)
- (19) この場合も, 宝石を売って遊興費をつくる女主人の使をして鞘をかせぐ話である。
- (20) Lankaster, *op. cit.* p. 792. なお各劇の上演回数が詳細に調査されている。
- (21) *op. cit.*, p. 293
- (22) P. Méléze : Répertoire analytique des documents contemporains d'information et de critique concernant le théâtre à Paris sous Louis XIV, 1659-1715, p. 47
- (23) Lisette : “Et fi, il faut voir avec quelle indifférence Angélique a reçu tous ces présents-là” (A. 1, S. 3)
- (24) Angélique “...je n'ose dire *Vous me fatiguez*” (S. 1)
- (25) 令嬢 Angélique は何でもおやりなさいとすすめられて, “Que tu es extravagante” と尻ごみしている (S. 7)
- (26) *Préface des Oeuvres de Molière*, in P. Méléze : *Le Théâtre et le public*, p. 44
- (27) *op. cit.* p. 50